

大乘

# DAIJO 法話

## み教えは海をこえて



北海道・善行寺住職  
なわ こうじょう  
名和 康成

今年の夏、世界仏教婦人会大会がアメリカのサンフランシスコで開かれました。現地の方々から熱烈な歓迎を受け、千七百人の方々が一堂に会して交流を深められました。親鸞聖人のみ教えは、アジア、南北アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアなど、日本だけでなく、言語や国や地域を越えて多くの方々の心の支えとなっています。私もちょうど一年前、若手僧侶の会のメンバーとともに台湾に行く機会に恵まれ、そのことを実感させていただきました。

のがこみあげてきました。  
台北法雷念佛会は、もともとは台北にあった浄土教を学ぶグループが、そのルーツなのだそうです。その中の一人であった林正村りんしょうそんさんが、インターネットを通じて香港の法雷念佛会とながりができ、本願寺派との関係が生まれまし。そして香港法雷念佛会の紹介で、本願寺派僧侶の野瀬瑞黙氏の常例法座が開かれるようになりしました。野瀬氏は日本から台湾の高雄に移住して伝道活動を行っておられた方でした。二〇〇七年十月には台北法雷念佛会が正式に結成され、二〇一三年に野瀬氏のご往生された後も法座活動は続けられ、現在でも毎週火、水曜の法座に加え、その他の場所でも定期的にご法座が開かれているとのことでした。

台湾で訪れたのは、台北市にある台北法雷念佛会ほつらいねんです。メンバーの皆さんは、私たちの到着前から建物の外に出てお待ちになり、満面の笑みでお出迎えいただきました。そして握手を交わすと、皆さんおもむろにお部屋までの上り階段の両脇に並ばれ、揃って歌ってくださいました。耳が、中国語での「真宗宗歌」だったので。耳慣れたメロディーに響く皆さんの歌声。台湾にも親鸞聖人のみ教えが伝わっていることを肌で感じつつ、心のこもった歓迎に、思わず熱いも

皆さんと交流を深める中で印象深く感じたのが、み教えに対する情熱と関心の高さです。台北法雷念佛会の仏間には、壁に大きな阿弥陀如来の絵像が掲げられ、お荘厳しょうごんがととのえられています。二十人ほどのメンバーの方々と一緒に讃仏偈さんぶつげのおつとめをした時、日本と台湾の発音が入り交じって聞こえる中、隣の方の聖典に細かい字でたくさん書き込みがあるのが見えませんでした。日本語がわかる方はほとんどいらっしやらないので、通訳のできる男性を通して私たちの普段の活動などを紹介しましたが、皆さんジツと目を向け静かに聞き入るご様子は真剣そのもの。部屋に置かれていたホワイトボードには、法座の日程や、お聖教しょうぎょうのページ数が書き記されており、普段から活発に勉強会を開かれている

様子も見てとれました。

台湾の方々の熱心さに触れ、思わず私は「浄土真宗のみ教えのどのようなところに魅力を感じていらっしゃるのですか？」とおたずねしたのです。すると、年齢は六十歳くらいでしょうか、女性の方がたった一言、「このような私であっても見捨てることなくお救いくださいる阿弥陀さまにただただ感謝です」とお話しくださったのです。「このような私であっても」ということは、決して順風満帆というわけではなく、きつとさまざまな苦悩を抱え、ご苦勞を重ねてこられたということでしょう。時にはご自身が抱えられる心の闇に思い悩まされることがあったかもしれません。まるで今までの人生を振り返るように、しみじみと語られつつ、あらため

て阿弥陀さまに手をあわされているご様子に、み教えを心の灯火ともしびとして歩んでこられたご生涯の一端を垣間見たような気がしました。

#### 十方微塵世界の

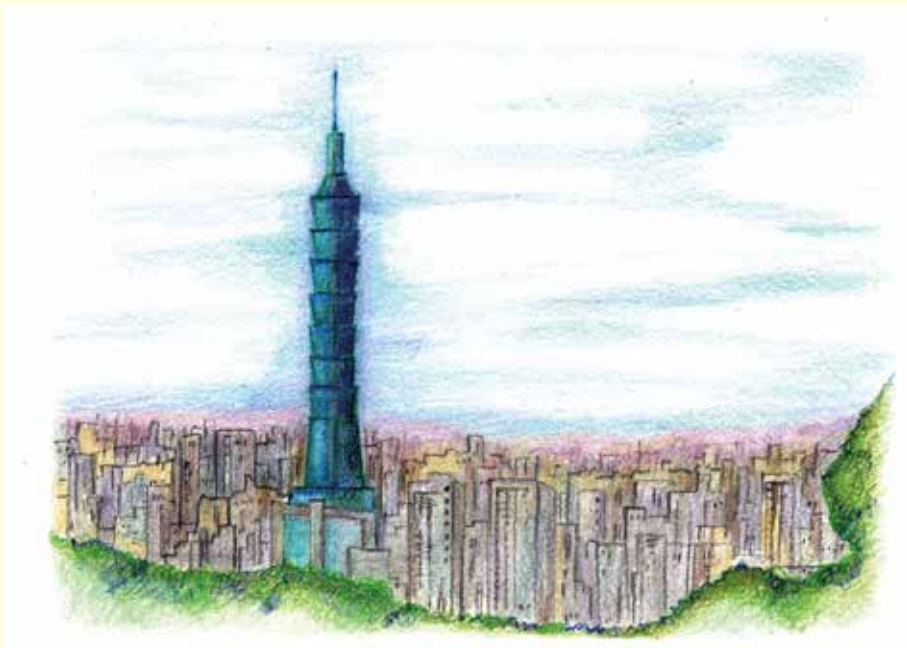
念仏の衆生しゅうじやうをみそなはし

撰取せんしゆしてすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

(註釈版聖典571頁)

あらゆる世界のお念仏に生きる人々をご覧になり、光明の中に撰め取って捨てることなく、必ずお救いくださる如来さまゆえ、「阿弥陀仏」とお呼び申し上げるのである、ということをお親鸞聖人はお伝えくださいました。いかなる国や地域の方であっても、人種、言葉、文化が異なるろうとも、阿弥陀さまの光明が至らないところ



カット 長井多美栄

はありません。また、私たちの煩惱あうごうや悪業あくごうをもさまたげとしないのです。煩惱を断たちきること  
ができず、悩み苦しむこの私を見捨てず救うと  
いう仏さまが阿弥陀さまなのです。

お別れの時には、私たちの姿が見えなくなる  
まで笑顔で手を振り続け見送ってくださいました台  
北法雷念佛会の皆さん。喜びにみちた皆さんの  
お姿は、日本から来た私たちに、親鸞聖人のみ  
教えの素晴らしさを言葉を超えて教え伝えてく  
ださっているようでした。

どのようなことがあっても見捨てることのない  
阿弥陀さまのお心を、わたくしもこの先の人  
生の折々に味わいつつ歩ませていただきたくとい  
う思いを、新たにさせていただいた台湾のご  
縁となりました。